

はじめに

「密教」と聞くと、皆さんはどんなイメージを思い浮かべますか？
不思議な呪文のように聞こえる「真言」でしょうか？ 飲食を絶って仏を目指す「即身仏」でしょうか？
燃え盛る護摩壇の前で経を唱える「加持祈祷」でしょうか？

わたしの学生時代に高野山の密教僧が主人公で超常の事件を解決していく『孔雀王』という漫画が流行り、大変面白く読んでいました。

わたしが密教に触れたのはこの『孔雀王』がきっかけで、曼荼羅や仏像の写真を眺めてはその美しさにうっとりとしたものです。

「密教」とは「秘密の教え」であり、お釈迦様の説かれた仏教（顕教：密教以外のわかりやすくあきらかな教え）という言葉に対比して使われているそうです。

初期の密教は民間の呪術や密法の影響を強く受けており、「マントラ（真言）」と呼ばれる呪文を唱えたり、手印を結ぶなどして災難や苦しみを退け、幸せを招き入れることを目的としていました。

七、八世紀頃にインドで起こった密教は唐の時代に中国へ伝わり、平安時代初期に空海・最澄によって日本に持ち込まれています。

当時、貴族を中心に広く信仰されていた「密教」は、やがて陰陽師を追いやり、その勢力を広めていきました。そんな「言葉で言い表すことのできない」奥深い密教の話を、わたしのような信徒でもない者が語るのは気が引けるのですが……。

日本に密教を広めた立役者、弘法大師・空海を中心に、僧たちがどんな不思議な力を持っていたのか、サラーと紹介していきます。

橘伊津姫

もくじ

密教

■ 真言宗開祖 空海	4
■ 雨乞いの戦い	6
■ 修円僧都に挑む	18
■ 西行法師	24
■ 高野の奥にて人をつくる	26
■ 日蔵	36
■ 吉野の山にて鬼にあう話	38
■ 観音菩薩の化身 良源	42
■ 夜叉に姿を変じて病魔を祓う	44
■ 龍神を招く 静観僧正	50
■ 雨を祈る法験	51
■ 大嶽の岩祈り失うこと	54
■ 大元帥法	58
■ 現代に甦る大元帥法	59
■ 空海 呪詛と祟りと鎮魂と	61
■ 最恐伝説 平将門	64
■ ルーズベルト大統領と呪詛の噂	67
■ 加持祈祷について	69
■ 高野山	72
■ 密教法具	82

密教 みつきよう

■真言宗開祖 空海

「弘法にも筆の誤り」の諺にも登場する弘法大師とは、空海のことです。宝龜五年（774年）に讃岐国多度郡屏風が浦、現在の香川県で生まれました。幼い頃の名前は佐伯真魚、真言宗の開祖として高野山を開いた人物です。

十五歳の頃から『論語』や歴史を学び、十八歳の時には京の大学寮で勉強をしますが、十九歳で大学の勉強が物足りなくなった空海は山林での修行に入ります。

延暦二十三年（804年）に長期留学僧として唐に渡り、密教を学びました。

実は空海の乗っていた船は嵐に流されて航路を大きく外れ、現在の福州長溪県赤岸鎮に漂着しましたが、そこで海賊と間違えられ、疑いが晴れるまで約五十日間、その土地を離れることは許されませんでした。大同元年（806年）、二年間の留学を終え、無事に帰国。

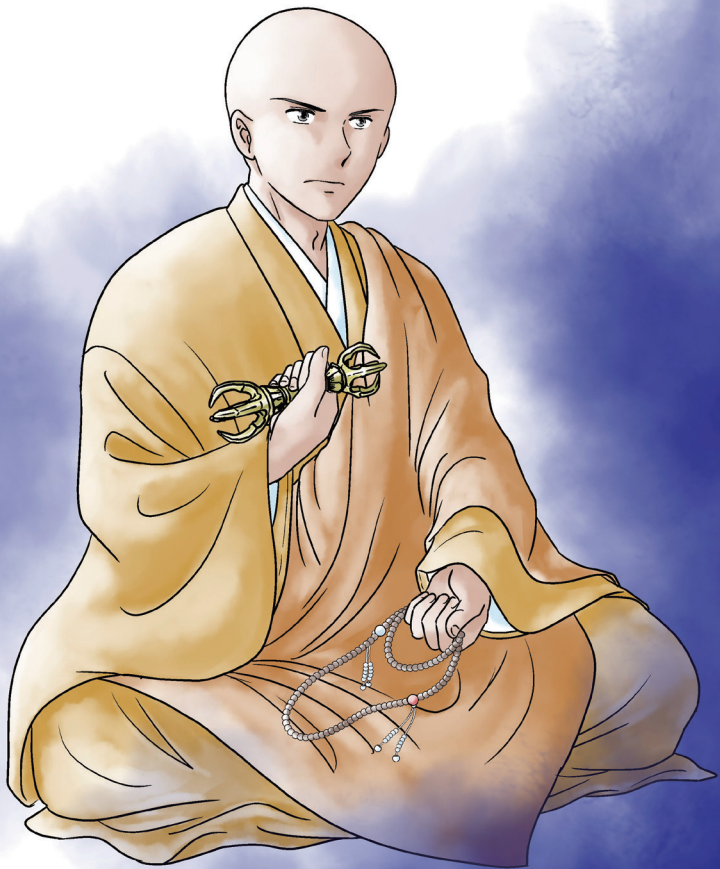
今のように航海技術の発達していなかった時代、多くの遣唐使が嵐を乗り越えられずに帰国を諦めたり、命を落したりする中で、無事に帰ってこられたのは本当に運が良かったと言えます。

唐から空海が持ち帰ったさまざまな経典や曼荼羅・法具は「御請来目録」に記入され、なんと今ではオンラインで内容を閲覧することができます。（文化遺産オンライン <https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/244548>）

弘仁七年（816年）、修禅の道場を開設する目的で高野山の下賜が認められ、開創に着手します。

この八年後の天長元年（824年）に神泉苑での雨乞い勝負がおこなわれたのです。

承和二年（835年）三月二十一日午前四時頃に享年六十二歳で亡くなったとされていますが、高野山では奥之院の靈廟でいまだ禪定（悟りを開くための禅の修行）をおこなっていると考えられています。



■雨乞いの戦い

時は天長元年（824年）、淳和天皇の御代のこと。

二月（現在の三月）から長い間一滴の雨も降らず、日照りが続いて人々を苦しめていました。

「いったい、いつになったら雨が降るんだ」

「このままでは田畑も俺たちも干上がってしまっ」

「これほどまでに雨が降らないのはきつと、お主上が天を怒らせるようなことをしたからに違いない」

「なんでもいい、誰でもいいから雨を降らせてくれ」

ついにはそのような恨みの声が朝廷にも届くようになりました。

人々の苦しみに心を痛めた淳和天皇は、東寺別当（寺社の長官）である空海と西寺の守敏僧都に雨乞いをするようにお命じになりました。

「このたびの日照りによって、朕の民草が渴きに苦しんでおる。即刻、祈雨の修法を執りおこない、天の龍に願って雨を降らせるようにせよ」

勅命を受けた二人は、まず守敏僧都が雨乞いの儀式を執りおこなうことになりました。

「でござ、この守敏めにお任せください。必ずや恵みの雨を降らせてご覧にいましよう」

守敏僧都は雨乞いのための祭壇を用意させると、七日間にも及ぶ祈雨の修法を執りおこないました。

